Junko Higasa

麗しき師弟愛

誰のことかと言えば、夏目漱石と寺田寅彦のことである。『吾輩は猫である』は脚本：夏目漱石、主演：寺田寅彦の舞台のようである。漱石は作品を通じて「君は偉大になれる。君の道を大いに進みなさい」と優しい眼差しと励ましの言葉で寅彦を導き、漱石を敬愛する寅彦は、直接的な言葉だけでなく、作品を通じて師の心を読みとったのであろう。その思いを受け取って見事に期待に応えて功績を遺した。好きな人のためには無条件に頑張れるものである。二人は立場上様々な共通点があった。そのために魂が響き合ったのだと思う。

その二人の共通点とは何か。まず二人が国家を担うエリートだということである。二人とも学校教育の現場に教師として立たざるを得なかったが、それについては周囲から多くの働きを期待された。現代のどこかの大学教授のようにスケジュールに忙殺されながら、内心では自分の道に没頭したい欲求が爆発的に膨らんでいた。漱石は文筆に、寅彦は実験に。しかし社会的義務を果たさなければならない二人の立場では、それがままならなかった。エリートの苦悩である。おかげで二人とも胃潰瘍になった。

このような生活条件的共通点があると同時に、二人の関わる分野にも共通点がある。文学と科学、それは細分化しすぎた現代の学問からすれば全く別物のように思えるが「古典物理学」は人間の自然科学を含んでいる。また昔の文科系教育には自然科学が含まれていた。だから二つの分野には感覚の上で共鳴できる部分がある。『科学の目的は「真」であり、それは同時に科学者にとって「美」でもありうる』という考えは、広く文学にも応用できるが、特に人間の真実を追求した漱石にとって、それは「自分の小説の目的は人間の真実を求め描くことであり、それは同時に美しい小説ともなりうる」という人一倍濃厚な現実ではなかったろうか？さらに図らずも同じ「和魂洋才」を懐に携えて、東洋と西洋が融合した坂を歩んだ二人を強く結びつけたのは「西洋に通じる日本人」という意識ではなかったのか。

漱石にとって自分の分野でできないことを実現してくれるのが寅彦であり、寅彦にとって自分の分野を後押ししてくれるのが、漱石の文学ではなかったのだろうか？二人がそれぞれに描いた世界。互いの発展に必要な刺激と、自分の分野に縛られる頭を休めてくれる解放感があっただろう。謙虚に、しかし前向きに人間として漱石の懐に飛び込んだ寅彦と、その真実を受け止めた漱石。二人にとって互いが心地よい「美」であったのではないだろうか？

私は寅彦の「ねえ君、不思議だと思いませんか？」という口癖に魅力を感じ、その言葉がそのまま彼の風貌に溶け込む。あの人好きのする雰囲気には、漱石ももしかして安らぎを感じたのかもしれない。漱石の弟子たちの中で唯一の科学者であった寅彦は、熊本の第五高等学校で教師と生徒として出会って以来、漱石と一番長く交流した弟子である。寅彦が漱石という人間を心底慕っていたことは「感動的」である。そこに人間の真実を感じる。文学的人類の方向からでなく、人間的科学者・寺田寅彦側から漱石を見ることによって、改めて文豪・夏目漱石ではなく、人間・夏目金之助の魅力が浮上してくる。漱石の理解しがたい人格への誤解が解けるように思う。(2012.2.5)